

「講義を増やすのは難しく、講義が倍増になれば、光を浴びぬめておく時間

も多くなり、十分に活用で使えない。講義が倍増になれば、光を浴びぬめておく時間がある。 (田中康晴)

## 化学テーマに

### リンダウ会合

研究者ら個人交流

ノーベル賞受賞者と大学院生ら若手研究者が語り合う



「リンダウ会合」が、6月来から7月初旬にかけてドイツ・リンダウで開催された。第59回目の今年は「化学」がテーマで、下村脩さんと野依良治さんら2人のノーベル賞受賞者が約40人のノーベル若手と交流した。そのアジア版を主催する「アジア版」は8月2日から10日は東京国際会議場(赤坂)で開かれる。

「リンダウ会合」は、第1回ノーベル賞を受けたスウェーデン国王スタフ6世の親族が主催した。

この会合は、引継から毎年開催している。午前中は全体講演、午後は分科会で自由討

論が基本で、6日間は、各国の学術支援団体がパートナーとなり、今年は日本から11人が参加した。

お茶の水女子大で博士号をとり、オックスフォード大学で環境問題を研究する石川崇さんは「強い刺激を受けた。世界中の若手と話し、学びは同じとわかったのも、助けになった」と振り返る。

04、05年にリンダウ会合に参加した小島昌俊さんが「アジアの学生のためにもこうした場を」とアジア版を提案。台湾のノーベル化学賞受賞者ユアン・リーさんが賛同して「アジアサイエンスキャン

プ」が始まった。3回目を迎える今年は日本、中国、台湾から7人のノーベル賞受賞者が参加。17カ国と地域の約200人の若手研究者らと英語で語り合う。(高橋真理子)

「アジアサイエンスキャン